

平成 23 年 5 月 8 日現在

機関番号：32615

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2009～2010

課題番号：21820038

研究課題名（和文） ペルシア時代後期のパレスチナにおけるユダヤ共同体の社会経済階級構造についての考察

研究課題名（英文） The Socio-economic Structures of Israelite Communities in Late Persian Era Palestine

研究代表者

魯 恩碩 (RO JOHANNES UNSOK)

国際基督教大学・教養学部・准教授

研究者番号：70527142

研究成果の概要（和文）：

ペルシア時代は旧約聖書、特にモーセ五書と預言書の形成において決定的な影響を与えた時代であるため、その時代におけるユダヤ共同体の社会経済構造を解明することが、旧約聖書学や聖書考古学において極めて重要な課題である。本研究では、聖書考古学及び文献学などによる多様なアプローチにより、ペルシア時代におけるユダヤ共同体の社会経済階級構造が、「古代農耕社会 (Advanced Agrarian Society)」であると同時に、ポスト崩壊社会 (Post-Collapse Society) 的特徴をも持っていたという認識に到達した。

研究成果の概要（英文）：

The post-exilic period, especially the Persian era, is a decisive time period during which such parts of the Old Testament as the Pentateuch (five books of Moses) and Nevi'im (Prophets) came to be finalized in their present forms. Therefore, it is a critically important task in the field of Old Testament Studies, as well as in Biblical Archaeology, to clarify the socio-economic structure of the Judean community in Persian era Palestine. Employing philological and archaeological methodologies, this research reached the conclusion that the socio-economic structure of the Judean community in Persian era Palestine can be analyzed most effectively and appropriately as an Advanced Agrarian Society which exhibits the characteristics of a Post-Collapse Society.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,080,000	324,000	1,404,000
2010年度	970,000	291,000	1,261,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,050,000	615,000	2,665,000

研究分野：聖書学

科研費の分科・細目：人文学・宗教学

キーワード：聖書文献学、聖書考古学、捕囚期以後、ペルシア時代、古代イスラエルの思想史

1. 研究開始当初の背景

(1) バビロン捕囚期以後の時代、特にペルシア時代は、モーセ五書や預言書などの旧約聖書が完結するために決定的な影響を与えた大切な時期であり、この時代のパレスチナ地域の社会経済的階層構造についての研究は、旧約聖書がどのような過程を経て、どの社会経済的階級によって正典化されたのかを理解し、評価するための極めて重要な手掛かりを提供することができる研究分野である。しかしながらこの研究分野における課題は、ペルシア時代後期におけるユダヤ共同体の歴史的状況を明確に立証する史料が極めて少ないことである。このことは、この時代の社会経済史や社会経済階級構造を再現するために大きな障害となっている。そのため、ペルシア時代のユダヤ共同体について研究する現代の聖書学者たちは、信頼性のある歴史の再構成という重要な課題を未だ解決できずにいる。

(2) 現在、Rainer Albertz と Erich Zenger を含む多くの旧約学者たちが、捕囚期および捕囚期以後ユダヤ共同体によって形成された「貧者の神学(Armenfrömmigkeit)」が存在したと主張する。彼らは、この「貧者の神学」が捕囚期以後、社会経済的下層民の階級意識を刺激し、当時のエルサレムの権力者たちにイスラエルの神が報復されるはずであるという独特の信仰を新たに作り出したという仮説を立てる。詩編と預言書の多くの部分が、この経済的疎外者グループによって、記録されたというのである。Albertz の仮説によれば、この著者グループは、当時、社会経済的権利を完全に奪われ、虐げられた貧しい小農民、羊飼、雑役労働者などであった。Albertz によれば、彼らは社会の片隅に追いやられ、侮蔑される下層民であり、施し物を受けながら生きる経済的弱者であった。Albertz の仮説は、大変興味深い内容である。しかしながら、この仮説は、捕囚期以後イスラエルの社会経済的な階層構造をあまりにも単純化しているのではないであろうか。Albertz は、上層階級と下層階級という単なる二分法に基礎を置いた仮説に焦点を合わせて自分の理論を展開している。しかし、捕囚期以後にパレスチナで形成された地域社会の複合性は、この二元的な社会階層モデルによって、果たして説得力のある説明ができるであろうか。捕囚期以後ユダヤ共同体の歴史の中で、Albertz が論じているように、小農民、貧民、羊飼、雑役労働者が、神学や

哲学的な議論に活発に参加し、高い文学性を持った神学文書を執筆するというようなユートピア的時代があったであろうか。

(3) 本研究は、捕囚期以後におけるユダヤ共同体が生み出した旧約聖書の大部分が実際には当時のピラミッド的な階級構造の中で極貧層にあたる農民階級、商人階級、職人階級、没落階級、放棄階級などではなくて祭司階級を含んだ中間階層によって執筆されたのではないかという疑問あるいは仮説から出発した。世界旧約学界において、特にペルシア時代後期のパレスチナにおける社会経済的階層構造についての理解は十分ではなかった。

2. 研究の目的

(1) 上述したとおり、ペルシア時代後期におけるユダヤ社会の歴史的状況を明確に立証することができる史料が極めて少ないという理由から、社会学的アプローチや考古学的アプローチを用いた捕囚期以後イスラエルの社会経済史研究は、この問題を解決するための効果的な手段である。したがって、本研究では従来の歴史批評学に偏重した研究方法論を脱し、考古学的アプローチや社会学的アプローチをより積極的に活用し、より立体的で総合的なペルシア時代後期のイスラエルの社会経済的階層構造の再構成を目指す。

(2) 本研究は、バビロン捕囚期以後、特にペルシア時代後期におけるパレスチナ地域社会の社会経済的階層構造の様態を具体的に理解することを目標とする。そのため、まず、従来の捕囚期以後イスラエル歴史研究の成果を十分取り入れると共に、その研究方法の限界や方法論的問題点を明らかにする。特に、① ペルシア時代後期におけるユダヤ共同体の社会経済状況とモーセ五書の内容との関連性の問題、②捕囚期以後、パレスチナ地域の社会経済的階層構造に中間階層が存在したか否かについての問題、そしてもし存在したとすれば、どのような機能を果たしたかという問題など、これまでの研究で十分に考察されていなかった問題を集中的に研究することを目指す。

3. 研究の方法

(1) 研究史の整理と理論構築を行う。歴史批評学による研究成果にも目を配りつつ、今日積極的に活用されている考古学的アプロー

チや社会的アプローチの議論に加わる。

(2) イスラエルの聖書考古学者たちと学際的に活発な意見交換を行う。

(3) 学期休み中は、ペルシア時代の発掘現場を訪れ、当時の社会経済階級構造を表す物質文化に対する理解を深める。

(4) 海外のペルシア時代の専門家を招聘し、国際シンポジウムを開催し、その成果を論文集として公表する。

4. 研究成果

(1) 本研究では聖書考古学や聖書社会学の研究成果を積極的に適用することによって、従来のペルシア時代後期におけるユダヤ共同体研究の限界を打破するための以下のような方法論のモデルを提示した。

①ペルシア時代に執筆された聖書のテキストと聖書考古学の成果を連携すること。

②ペルシア時代におけるユダヤ共同体は、孤立した経済社会単位ではなく、当時のペルシア帝国の一部分であったという事実に基づき、ペルシア帝国の政策や制度研究からのアプローチすること。

③当時のユダヤ共同体におけるペルシア帝国の政策の方向性は、農村化、商業化、軍事化、民族的集産主義化であったことから、その時代背景がモーセ五書の形成に与えた社会経済的、政治的、宗教的影響について考察すること。

(2) 本研究では、上述した三つの方法論的前提に基づいて、分析を進めた結果、ペルシア時代におけるユダヤ共同体の社会経済階級構造が、「古代農耕社会 (Advanced Agrarian Society)」であると同時に、ポスト崩壊社会 (Post-Collapse Society) 的特徴をも持っていたという認識に到達した。

(3) この認識を中心に、創世記 18 章における独特な審判思想がペルシア時代におけるユダヤ共同体の社会経済的階級構造の特異性によって生じたものであるという新しい仮説を打ち立て、その研究成果をまとめ、2009 年 10 月 19 日、日本聖書学研究所にて、「全地をさばく者は公義を行うべきではないか - 創世記 18 章における神の懲戒的正義の思想史の位置について」というテーマで研究論文を発表した。そして、さらにこの研究論文内容を発展させ、英語に翻訳し、2009 年 11 月にアメリカで行われた Society of

Biblical Literature (世界聖書学会) において、「Shall not the Judge of all the earth do right? - The Problem of YHWH's Punitive Justice in Genesis 18 and Ezekiel 14 & 18: Historical Development of Theological Concepts」というテーマで研究論文の発表を行った。この研究論文は、これまで研究者たちによって、バビロン捕囚期以前にヤーウィスト (J) によって記された神人同形論に基づく原始的物語として捉えられた創世記 18 章が、非常に洗練された個人主義的倫理感覚に基づいたペルシア時代のテキストであるということを文献学的、考古学的、社会学的に論証し、新しい解釈の可能性を示し、旧約聖書のモーセ五書を形成した当時のユダヤ社会の全体像を理解するための重要な手がかりを与えたと評価できる。

(4) 上述した研究成果の内容を集約した英語論文が、世界的旧約聖書学術誌である *Vetus Testamentum* を通して 2011 年出版される予定である。この論文は、創世記 18 章とペルシア時代のユダヤ共同体の関係性を論じた希少な論文であり、エゼキエル 14 章および 18 章と創世記 18 章の間における審判思想の発達過程を通時的アプローチによって明らかにした最初の論文であるという点において学問的重要性がある。

(5) 平成 22 年度は、本研究の最終の年であるため、ペルシア時代におけるユダヤ共同体の社会経済構造について活発な学術活動を行っている国際的研究者たちを招聘し、これまでの 2 年間の研究成果の集大成として、国際シンポジウムを開催した。イスラエルから Dr. Avraham Faust (Bar-Ilan University)、Dr. Oren Tal (Tel Aviv University)、Dr. Alexander Fantalkin (Tel Aviv University) の 3 人の世界的に著名な聖書考古学者を招聘し、守屋彰夫教授 (東京女子大学)、佐野好則 上級准教授 (国際基督教大学)、および研究代表者の計 6 名のパネリストがペルシア時代におけるユダヤ共同体とその周辺地域の社会経済構造について論文発表を行った。特に今回のシンポジウムでは、従来紀元前 450 年頃であるとされてきたモーセ五書の正典化が、実際は、紀元前 400 年頃に行われたのではないかという新しい仮説について様々な観点から、旧約聖書学者、聖書考古学者および歴史学者の間で、活発な意見交換や議論を可能にした大切な機会であった。今回のシンポジウムには、学外の聖書考古学者および旧約聖書学者が来場し、パネリストとの有意義な質疑応答も行われた。一般公開 (2 日間) の来場者数は、統計約 70 名であった。シンポジウム終了後に行われた 6 名のパネリストによるディスカッション・セッションでは、シ

ンポジウムによって得られた新しい認識に基づいて、各パネリストが今年6月末までに原稿を完成し、出版することで合意し、現在準備を進めている。出版については、世界的人文科学出版社である Sheffield Phoenix Press と出版契約をすでに結び、「From Judah to Judaea: Socio-economic Structures and Processes in the Persian Period」というタイトルで2012年の出版を計画している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① Johannes Unsok Ro (魯恩碩), The Theological Concept of YHWH's Punitive Justice in the Hebrew Bible: Historical Development in the Context of the Judean Community in the Persian Period, *Vetus Testamentum* 61. 3で2011年9月出版予定、査読有り
- ② 魯恩碩、旧約聖書における審判思想の歴史的発展過程についての考察—ペルシア時代におけるユダヤ共同体の懲戒的正義に関する問いとその時代背景を中心に、聖書学論集第42号、2010年、121-142頁、査読無し

[学会発表] (計4件)

- ① Johannes Unsok Ro (魯恩碩), Piety of the Poor in the Community of Qumran and Its Historical Root, Presented at the International Symposium on Socio-economic Structures of Judah and Its Neighbors in the Persian Period, International Christian University, Tokyo, Japan, February 17, 2011
- ② Johannes Unsok Ro (魯恩碩), The Socio-economic Structures of Judean Communities in Late Persian Era Palestine, Presented at the SBL International Meeting, University of Tartu, Tartu, Estonia, July 28, 2010
- ③ Johannes Unsok Ro (魯恩碩), Shall not the Judge of all the earth do right? - The Problem of YHWH's Punitive Justice in Genesis 18 and Ezekiel 14 & 18: Historical Development of Theological Concepts, Presented at the SBL Annual

Meeting, New Orleans, LA, U.S.A., November 21, 2009

- ④ 魯恩碩、全地をさばく者は公義を行うべきではないか - 創世記18章における神の懲戒的正義の思想史の位置について、日本聖書学研究所、日本聖書神学校、東京、2009年10月19日

[図書] (計1件)

- ① Johannes Unsok Ro (魯恩碩), From Judah to Judaea: Socio-economic Structures and Processes in the Persian Period, Sheffield Phoenix Press, 2012年出版予定

[その他]

ホームページ等

www.rohaus.net/jsps/jsps.htm

6. 研究組織

(1) 研究代表者

魯恩碩 (RO JOHANNES UNSOK)

国際基督教大学・教養学部・准教授

研究者番号：70527142

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし